九成宮醴泉銘

唐・632年／欧陽詢（557～641）

（教科書 36～39 ページ）

概要・特徴

唐の第2代皇帝・太宗は、九成宮（もとは中国 隋の離宮・仁寿宮のあった場所）を修復し、避暑地として用いた。高地であることから水源に乏しかったが、太宗が避暑に赴いたとき、同地の一隅から清水が偶然に湧き出した。これを王朝繁栄の吉兆（めでたいことの起きる前兆）と考えた太宗が、建立を命じたのがこの碑である。唐の秘書監（秘書省の長官）の魏徴が撰文し、欧陽詢が書写した。欧陽詢は当時76歳で、晩年の書である。九成宮の環境のすばらしさを説き、太宗の功績をたたえる内容が書かれている。原碑は現在も九成宮遺址（陝西省）に建っているが、古くから繰り返し採拓が行われてきたことなどから、文字が摩滅し、補刻が施されている。

直線的で鋭い点画や緻密な構成、背勢などが特徴である。欧陽詢の楷書作品の頂点に位置し、その端正で厳格な書風は「楷書の極則」とよばれる。

作者について

欧陽詢（557～641）は、隋・唐の官僚。書の名手として知られる「初唐の三大家」、「唐の四大家」の一人。字（別名）を信本といい、潭州臨湘（現在の湖南省）の出身である。並み外れて博学で聡明な人物であったといわれている。隋の煬帝、唐の高祖、太宗に仕え、いずれの治世においても厚い信任を得た。弘文館学士に任ぜられ、指導者として活躍。あらゆる書体をこなしたと伝えられ、「化度寺碑」「温彦博碑」「皇甫誕碑」などの楷書の他、隷書、行書、草書や小楷（小さな楷書）の模本・刻本がいくつか伝わっている。

時代背景

唐の第2代皇帝・太宗に官僚として仕え、厚い信頼を得て重用されたのが、虞世南・欧陽詢・褚遂良である。彼らは弘文館において貴族や高官の子弟たちに書を指導するなど、書の名手としても活躍した。王羲之の書法を受け継ぎ、それぞれに楷書の傑作を生み出した三人は、「初唐の三大家」とよばれ、楷書の確立に大きく貢献した。